

カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデス

—朝鮮民主主義人民共和国を三度訪れたキューバ人女性

藤目ゆき

(はじめに)

本年 2015 年 4 月、パナマの首都パナマ市でキューバのラウル・カストロ国家評議会議長と米国のバラク・オバマ大統領が、パナマで開かれていた米州サミットの合間に、非公式ながら会談したことが報じられた。1961 年に両国が国交を断絶して以来、両国の首脳が会談するのは初めてで、両国が歴史的和解へと進む可能性が高いと指摘されている。半世紀以上続いた米国の対キューバ経済封鎖が解除され、「カリブ海の冷戦」が終結するという兆しがみえてきたわけである。

アジア現代女性史研究会はこれまで研究プロジェクト「冷戦時代の国際女性運動」を進め、冷戦が世界にもたらした悲惨と災禍、そして冷戦に抗い平和と自由を希求して運動を展開してきた世界の女性たちに関する調査に取り組んできたのだが、今後のキューバ・米国の動向に注目していきたい。米国がキューバ封鎖を全面的に解き、両国の国交正常化が実現し、キューバの独立と自由のために人生を捧げた無数の男女の労苦が真に報われることを念願している。

本稿は、カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデス (Candelaria Rodriguez Hernandez) というキューバ人女性に関する研究ノートである。彼女もまた、キューバの独立と自由を求めて闘ったキューバ人の一人である。カンデラリアは、朝鮮戦争最中の 1951 年 5 月に国際民主女性連盟 (WIDF) が朝鮮に派遣した国際真相調査団 (以下、WIDF 調査団と略称) にキューバを代表して参加した。法律家であり、調査団に参加した 20 人の中で最年少であった。彼女はその後、1963 年と 1993 年にも朝鮮を訪問している。

カンデラリアの人物像は没年などの基本情報をふくめて今なお不明な点が多い。が、ささやかながら中間報告として、これまでの調査でわかったことをまとめておきたい。

第 1 章 WIDF 調査団に参加したカンデラリア

カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデスの家族的背景や生育歴に関しては、小冊子『40 年後に再び訪ねた朝鮮 (Korea Revisited after 40 Years)』(Foreign Languages Publishing House, Pyongyang, Korea, 1994) の表紙にある著者略歴に、次のように書かれている。1928 年 10 月 23 日、キューバのハバナにおいて大ブルジョア商人の家族に誕生。カトリック系の

学校で初等教育・中等教育を受けた。1949年、ハバナ大学で法学の学位を得て卒業し、リカルド・ドルス・アランゴ国民賞を受賞した。

後にキューバ革命のリーダーとなるフィデル・カストロは1928年（1927年説もある）に生まれ、1945年にハバナ大学に入学して法学を学び、1950年に卒業。50年から52年にかけては弁護士として貧困者のために活動としたといわれる。カンデラリアは、フィデル・カストロより一つか二つ若いがほとんど同世代で、同時期にハバナ大学で同じ法学を学び、カストロよりも一年早く卒業したことになる。

リカルド・ドルス・アランゴ（Ricardo Dolz y Arango, 1861-1937）は、キューバ独立のために尽くした法律家である。彼の名前を冠したこの賞は、キューバの法学生に与えられる最高の荣誉ある賞であり、後に米国に亡命することになるマヌエル・マルケス・スターリン（プリマス州立大学名誉教授）やマリオ・セレサ（ミシガン州立大学名誉教授）なども1950年代に同賞を受賞している⁽¹⁾。



カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデス
1993年頃。

カンデラリアがハバナ大学を卒業した翌1950年、アジアで朝鮮戦争が勃発する。1951年1月、朝鮮民主女性同盟は、WIDFをはじめ世界の女性たちに対して、米国・国連軍が朝鮮に軍事攻撃を行っていることを訴え、世界の女性たちに兵士を朝鮮に送らないよう求めるアピールを発信した。これを受けて、WIDFは東西両陣営20か国の女性で構成する国際真相調査団を朝鮮へ送った。調査団は子どもをふくむ民間人に対して「国連軍」の旗の下で米兵の戦争犯罪と虐殺が行われている事実を確認し、その内容を報告書にまとめた。カンデラリアは、この調査団にキューバの代表として参加したのである。

カンデラリアを送り出したのは、キューバ民主女性連盟（Federación Democrática de Mujeres Cubanas：FDMC）である。キューバでは1920年代以降、フェミニズムの波が高まり、キューバ共産党（1944年に人民社会党と改称）の影響も手伝って活発な女性運動がくりひろげられていた。1920年代から30年代にかけては全国フェミニスト連合（Alianza Nacional Feminist、

⁽¹⁾ スターリンについては'Manuel Márquez Sterling':<http://www.amazon.com/Manuel-M%C3%A1rquez-Sterling/e/B001KMITQY>、マリオ・セレサについては'MSU Law Mourns the Loss of Professor Emeritus Mario A. Ceresa':<http://www.law.msu.edu/news/2015/Ceresa-Death-Notice.html> を参照

1928年)や女性労働者のユニオン (La Union Laborista de Mujeres、1930年、La Union Nacional de Mujeres、1933年)、全国女性会議 (Congreso Nacional Femenino、1939年)といった女性組織が誕生し、国際女性デー祝賀の取り組みも盛んに行われるようになった。そして1949年、キューバ民主女性連盟が創立され、この組織が WIDF に加入していた⁽²⁾。

WIDF 調査団にはソ連とヨーロッパ、アジア、アフリカ、南北アメリカの諸国から次の21人が参加した。ヨーロッパ圏の東側諸国からはマリア・アヴシヤンニコワ (ソ連)、ミルシェ・スヴァトソヴァ (チェコスロバキア)、ヒルデ・カーン (東ドイツ) の3人、ヨーロッパ圏の西側諸国からは西独のリリー・ヴェヒター、ベルギーのジャメーン・ハネヴァード、オランダのトレース・ソニエト・ヘイオリゲルス、英国のモニカ・フェルトン、デンマークのイーダ・バックマンとケート・フレロン・ヤコブセン、フランスのジレット・ジグラー、イタリアのエリザベス・ギャロ、オーストリアのエヴァ・プリースターの9人、アフリカからはチュニジアのファトマ・ベン・スリマンとアルジェリアのアバシア・フォディルの2人、アジアからは中国の劉清揚・白朗・李鏗、ベトナムのリ・チケの4人、そして南北アメリカからはカナダのノラ・K・ロッド、アルゼンチンのレオノール・アギラ・バスケス、キューバのカンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデスの3人である⁽³⁾。カンデラリアは当時、22歳。21人の女性たちの中で最年少であった。

WIDF 調査団は1951年5月16日から27日にかけて調査を行い、その結果を報告書「朝鮮における米軍の残虐行為」(以下、WIDF 報告書と略称)にまとめ、WIDF 本部に提出した。この報告書において、WIDF 調査団は米軍が朝鮮民族絶滅のためのジェノサイドを行っていることを認め、朝鮮人民に対する国連軍の残虐行為が人道の原則に反するばかりか国際法にも反する戦争犯罪であると断定した。そして、朝鮮戦争の即時終結、外国軍の即時撤退、朝鮮人民に対する即時の援助を世界のすべての人々に呼びかけた。WIDF 報告書は、英語・フランス語・ロシア語・中国語・朝鮮語の5か国語でオリジナルが作られ、それらが24か国語に翻訳、数千万部が発行された。これらは WIDF から国連機関と世界各国政府、数千の個人と団体に送付され、朝鮮戦争停戦のための国際世論の形成に深甚な役割を果たした。スペイン語訳を担ったのはカンデラリアであった⁽⁴⁾。

WIDF 報告書は当時米軍の占領下にあった日本においても邦訳されている。占領米軍が朝鮮戦争に出撃する基地として日本各地を軍事的に利用している状況にあって、米軍の朝鮮戦争に反対する平和運動は厳しい弾圧の対象であり、ましてや日本から WIDF 調査団に代表を送ることはありえなかった。それでも WIDF に加入していた日本民主婦人協議会は WIDF 報告書の邦訳を『血の叫び』と題する小冊子として刊行し、人々に普及させようと

⁽²⁾ Dawn Duke, "Literary Passion, Ideological Commitment: Toward a Legacy of Afro-Cuban and Afro-Brazilian Women Writers", Associated University Presse, 2008, p.228.

⁽³⁾ 調査団員の英語表記は次のとおり。Nora K. Rodd (Canada), Chair; Liu Chin-yang (China) Vice-chair; Ida Bachmann (Denmark) Vice-chair; Miluse Svatosova (Czechoslovakia) secretary; Trees Soenito-Heyligers (Netherlands) Assistant Secretary; Dr. Monica Felton (Great Britain); Maria Ovsyannikova (USSR); Bai Lang (China); Li Keng (China); Gilette Ziegler (France); Elizabeth Gallo (Italy); Eva Priester (Austria); Hilde Cahn (German Democratic Republic); Lilly Waechter (German Republic); Dr. Germaine Hannevard (Belgium); Li Thi Que (Vietnam) Candelaria Rodriguez (Cuba), Leonor Aguiar Vazquez (Argentina); Fatma Ben Sliman (Tunisia) Abassia Fodil (Algeria) and Kate Fleron Jacobsen (Denmark)

⁽⁴⁾ 藤目ゆき「国際女性調査団のみた朝鮮戦争」『女性・戦争・人権』第3号、126-148頁、2000年5月

した。ところが、この小冊子を頒布しようとした女性活動家たちは摘発・逮捕され、活動家の1人は1年以上も投獄されている⁶⁾。もう16年も前のことだが、私はこの小冊子の現物を見るために、朝鮮戦争当時日本民主婦人協議会の指導者であった松崎濱子氏を訪ねた。80代後半にさしかかっていた松崎氏は、封印された段ボールの中から埃まみれの『血の叫び』をとりだして見せてくれた。「非合法文書」の摘発を避けて秘匿したまま、半世紀もの間、松崎氏自身も見たことのないものだった。

このような日本の事例からだけでも、WIDF 報告書の頒布が西側諸国、とくに自国が米国による朝鮮攻撃に密接に協力している国々では容易ならざる活動であったことが推察できる。ましてや調査団に加わって調査を実施することの難しさは明白である。

そもそも今から60年以上も前にヨーロッパやアフリカ、南北アメリカの女性たちが故国から遠く離れた極東を訪ねることは、旅の苦勞という一点を考慮だけでも並大抵のことではなかったのは明らかである。しかも訪問先は危険な戦場であった。実際に各所で幾度も空襲警報に促されて防空壕に避難したり、すぐ近くで時限爆弾が炸裂するといった、戦火の中の調査であった。

さらなる脅威は政治的なものである。WIDF 報告書の内容が衝撃的であっただけに、西側諸国はこの報告書を「全く根も葉もないでたらめ」であり、「嘘つきと、嘘を見破れない愚か者と、邪悪な共産主義者たちがでっちあげた政治プロパガンダ」にすぎないとして葬ろうとした。例えば英国のモニカ・フェルトン、西ドイツのリリー・ヴェヒター、そしてキューバのカンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデスは自国に帰ってから解職や起訴、投獄といった政治的迫害を免れなかった。詳しくは『アジア現代女性史』の第7～第9号を参照していただきたいが、モニカ・フェルトンは英国労働党員であり、アトリー労働党政権のもとで都市開発公社総裁という公職にあったが、その地位を追われ、議会では彼女を反逆罪で死刑に処すべきだとの論陣が張られた。リリー・ヴェヒターは西ドイツの米軍占領地区に住む主婦で、女性団体の会長であり、ドイツ社会民主党 (SPD) の党員であった。彼女は米軍法廷に召喚され、有罪を宣告されて投獄された。そしてカンデラリアはキューバへの帰途、ニューヨークで逮捕された。そこで彼女は飛行機に乗せられ、ハバナに到着し飛行機を降りるやいなや、軍事情報部と共産主義活動調査局によって逮捕・連行される。

カンデラリアが人民社会党の正式な党員であったかどうかを示す資料は未見だが、彼女が WIDF の国際調査団に参加したことだけでキューバ政府から人民社会党系の危険人物とみなされていたことに疑問の余地はない。さらに、1952年3月には米国政府と米国企業に後援されるバチスタが軍事クーデターを執行して大統領に就任する。同年に行われた議会選挙は無効となり、キューバの対米従属は加速していった。「アメリカ帝国主義の暴虐」を大声で叫び続けることは身の危険に直結しており、カンデラリアの活動もバチスタ政権と在ハバナ米国大使館によって監視されていた。例えばカンデラリアたちは1953年に WIDF が開催した世界女性大会に出席するためコペンハーゲンに旅立つが、ハバナの米国大使館は1953年5月29日付の極秘情報として『国務省外務局報告』にカンデラリアたち7名の女性の名前を挙げ、コペンハーゲン世界女性大会に出席のため5月25日と27日

⁶⁾ 藤目ゆき「冷戦体制形成期の女性運動—占領下の日本民主婦人協議会と朝鮮戦争」三宅義子編『日本社会とジェンダー』(明石書店、2001年)

にオランダ航空でハバナを離陸したこと、カンデラリアをふくむ6人は「共産主義者が後援・奨励する活動に活発」であり、1人は大使館が把握していない人物だが同じ傾向の女性とみてよい、と、本国に報告している⁶⁾。

厳しい弾圧や迫害に抗して朝鮮戦争の真相調査に従事し、恐るべき事実を世界に告発することはとてつもない苦勞と勇気が必要な大仕事であった。それをやってのけた彼女たちは、一体どんな女性たちなのだろう？

その答えに近づく手がかりになるのが、彼女たちが朝鮮からの帰国後に公にした著作である。モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』は、モニカ・フェルトンが WIDF の招待状を受け取ってから帰国するまでの旅行記である。調査団の女性個人々の表情や服装から発言や行動の様子まで生き生きと、時にはユーモラスに書いてあり、公式報告書では分からない等身大の女性たちの姿が窺える。フランスの作家ジレット・ジグラーは、ユニークなことに、訪朝の体験を小説の形で表現した。『江西の殺人』というその小説は、女性調査団の一員だったフランス人女性が調査中に朝鮮戦場で命を落とし、その日記が発見されるという架空の物語なのだが、駐仏米軍や労働者の闘い、朝鮮へ派兵されて正気を失った若者などの姿を描いてフランスの矛盾をあぶりだしている。あるいはまたデンマークのケート・フレロン。彼女は第二次大戦下から反ファシズムの雑誌を編集・出版してきたジャーナリストで、自分の雑誌その他に朝鮮で見たことを書き、単行本も刊行している。後日談だが、彼女はベトナム戦争中に平壤で開かれた国際平和集会に出席している。会場に朝鮮戦争当時の平壤を訪ねたことのある外国人は彼女だけだった。さらにまた、中国の白朗も、多くのルポルタージュを書いている。朝鮮戦争で親を失った子どもたちや穴ぐらで活動を続ける作家たちの姿、そして 50 年代の国際女性運動で出会った女性どうしの友情を書いたルポルタージュは貴重であり、興味深い。これらの著作は、現代史・女性史の貴重な史料である。公式に出された WIDF 報告書が重要文書であることは確かだが、調査団に参加したそれぞれの女性が自分一人の責任において残した著作群にはまた別の価値がある。それらは個人的な感情も考えも織り交ぜて書かれており、数々のエピソードが満載で、公式な報告書には期待できない「彼女たちのみた朝鮮」や「彼女たちの国際運動」のリアリティーが伝わってくるのである。

カンデラリアもキューバへの帰国後、自分がスペイン語へと翻訳した WIDF 報告書の頒布に取り組んだだけでなく、自分自身の見聞や個人的な体験をふくめて別の報告文を書いたのではないだろうか。しかし、カンデラリアが WIDF 調査団の参加からまもない時期に書いた文章は未だ発見できていない。今後、キューバ研究者の協力を得て、単行本や小冊子、雑誌や通信への寄稿などを探査したいと念じている。

それでも、カンデラリアの人柄や彼女が国際女性運動・平和運動において果たした役割が伝わってくる資料が現時点で皆無というわけではない。本稿の第 2 章ではモニカ・フェルトンや白朗の文章に登場するカンデラリアを紹介しよう。そして第 3 章では、小冊子『40 年後に再び訪ねた朝鮮』などを参考に、1964 年と 1993 年のカンデラリアの朝鮮訪問をも

⁶⁾ U.S. Embassy Havana, Despatch 1870, May 29, 1954 (Confidential U.S. State Department Central Files: Cuba Internal and Foreign Affairs 1950-1954: <http://www.latinamericanstudies.org/embassy-1950-54.htm>). カンデラリアと共に名前が挙げられたのは、ソイラ・カステヤノス (Zoila CASTELLANOS)、エロイサ・モラン (Eloisa MORAN)、マグダレーナ・セラ (Magdalena SERRA)、アウレリア・レスターノ (Aurelia RESTANO)、アマリア・カルボ・ガルシア (Amalia CALVO Garcia)。

とりあげたい。

第2章 追憶されるカンデラリア

モニカ・フェルトンや白朗たちの著作の中に、カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデスは友情をこめて回想されている。

モニカ・フェルトンの『だから私は朝鮮へ行った』の中には出会った多くの女性たちの様子が紹介されているが、同書に最初に登場する調査団員がカンデラリアである。チェコスロバキアのプラハで初めてモニカとカンデラリアは出会った。その場面を紹介しよう。

つやつやの髪をした若い女性が素晴らしい赤いコートを肩にはおって、ラウンジの真ん中に座っているのが目をひいた。(中略)

レジーナ(チェコの女性団体メンバー－訳者注)は、カンデラリアの赤いコートの肩に親愛をこめて自分の腕をまわして、「彼女がミス・カンデラリアよ。キューバからきたミス・カンデラリア・ロドリゲス」。

ミス・カンデラリア・ロドリゲスは、レジーナの話聞いて想像していたよりもはるかに若かった。彼女の大きくて形の良い頭、くるくるまわる目、オリーブ色の肌はハバナ煙草の広告ポスターをそのままはがしてきたようだった。首から下は何枚もの羊毛のセーターを極端なまでに着込んでいるので、どんな体型の人がさっぱりわからないほどだった。

「夕食にしましょうか？」レジーナが提案した。

カンデラリアは椅子の肘掛けに手をつっぱって立ち上がろうとした。立ち上がると、痛みのけいれんが顔をよぎった。「腰痛がひどくて！」と彼女は説明した。「ひどいの！」私たちはゆっくりとレストランに向かって移動した。「来るとき二日間オランダにいたの。ずっと雨。雨、雨、雨。そして寒くて！なんてひどい寒さ！ひどい、ひどい寒さだったわ」。

私(モニカ・フェルトン－訳者注)は「ここも寒いわよ」と言った。「寒いわ！私、寒さで死んでしまうわ！・・・私の国では本当に天気がすばらしいの。すばらしいのよ！」そう言う彼女の目が輝いている。もう彼女は極端にホームシックだった。「そんな素晴らしい国なの、私の国は・・・」

ウェイターがイタリアのベルモットワインの大きなグラスを運んできた。

カンデラリアは少し私のほうにもたれ、すぐ背中に手をまわして尋ねた。「あなたのお国は、英国は、いつも雨がふるの？・・・そうなの？・・・ちがう？」彼女は悲劇的にほほえんだ。英国の気候のせいで引き起こされるすべての苦しみを想像しているらしい、あたたかい気持ちを感じられた。

「いつもじゃないわ。いつもみたいに思えることも時々あるけれど」と私は返答した。

私は彼女を好きになり始めた。(7)

カンデラリアは慣れないヨーロッパの気候で体調を崩してしまい、翌日にはさらに多くのセーターを着込んでいた。顔はやつれてはて、身動きも苦痛な状態で周りをはらはらさせたが、「私は行くの！ 医者がなんといっても行くの！」と決然としていた。21人が全員集合したのは中国の瀋陽で、そこから丹東へ移動し、そこから女性たちは鴨緑江を越えて朝鮮へ入った。もちろんカンデラリアもいっしょである。

ヨーロッパやアジアの女性たちは、熱帯の国からやってきた、とびぬけて若く感情表現が豊かなカンデラリアに眼をみはり、当初は戸惑うこともあったのかもしれない。中国人の白朗は、最初は彼女を苦手を感じたという。

この若いキューバの女性弁護士は、火のような熱情をもっている。深紅の外套を好んで着て、ある時は長い髪を肩にたらし、ある時は昔風に髷を結っていた。小声で話すことに慣れておらず、幅広い音域で、世間話をするときも、会議のときも、いつも抑揚のある、朗々とした高い声で、美しい詩を朗読しているように話した。顔の表情も豊かで、どんなときでも、歌を聞いたら踊りだし、景色を見たら感動する、そんな、豪放にすぎ、熱狂的なエネルギーをすぐ炸裂させる人だ。それは制御不能のようだった。静かにしているときもあったが、無理しているように見えた。実は、朝鮮で一緒に働いていた時、私は彼女が好きになれなかった。わがまますぎるように思っていた。(8)

が、その最初の印象はどんどん変わっていった。

アメリカ帝国主義が朝鮮で行った非人道的なひどい行為に、カンデラリアは深く激しい恨みをいだいた。罪もない朝鮮の女性や子どもの受難に、悲痛な思いを更に深くした。朝鮮で、彼女はすぐ感情を動かされた。あるとき、朝鮮のホストが、私たちのために、連合空軍が朝鮮の平民を爆撃している映像を放映したことがあった。負傷した赤ん坊が、爆死した母親の乳房をつかんで泣き叫んでいるシーンになって、カンデラリアは顔を曇らせると大声で泣き始め、それをきっかけに場内の人々はみな声もなく泣いた。(9)

カンデラリアは頼もしい仲間でもあった。

彼女は朝鮮から帰国後、ベルリンの国際民主女性連盟のビルの中で、三日三晩かけて、3、4万字にわたる調査団報告書「われわれは訴える」をスペイン語に訳しタイプして上梓した。(10)

(7) Monica Felton, "That's Why I Went", Lawrence & Wishert, London, 1953, p.17.

(8) 白朗「遠方の友を懐かしむ」西田千津訳、『アジア現代女性史』第10号(本号)、2015年7月、118頁

(9) 白朗、前掲、118頁

(10) 白朗、前掲、118-119

さらにキューバに戻ると、カンデラリアはたちまち拘束されるような弾圧を受けながら、各地で大衆集会をよびかけ、自分が見た米軍の暴行と朝鮮人民の不屈の戦いを人々に知らせた。白朗は、モニカ・フェルトンからカンデラリアの帰国後の闘いを伝え聞いた。

彼女はキューバへ戻ると、すぐに人々を集めて集会を開いた。自分の目で見たアメリカ軍の暴行と朝鮮人民の勇敢で不屈の精神を、現場にいるかのごとく人々に教えて目を開かせた。彼女の宣伝で、ラテンアメリカ 20 数か国の植民地に影響が及んだのだ。彼女の勇敢さと熱情からみて、その扇動力の大きさは、手に取るようにわかる。この間、彼女が捕まったのは一度だけではない。法廷で、彼女は弁護士として自分を弁護した。理路整然と、堂々たる弁舌であった。その鋭い饒舌さと辛らつな風刺にかかれれば、狡猾で悪賢いアメリカ軍の裁判官も形無しで、手も足も出なかった。あるときなど、開廷の第一声は、「すみません、カンデラリアさん、今日は、お話はほどほどにしてくださいね。いいですか？」だった。裁判官は、怒っているようにも見えたが、明らかにお願い口調だった。当然、カンデラリアは、容赦なかった。彼女は正義と真理を心底愛していたからだ。

「この目で見たことだから良心がうずくのです。私の良心は、自分の目で見たことを尊重します。それが最も公正ですから。私を説得しようとしてもだめですよ。生ある限り、どんな力も私の真実の話を阻止することはできないのです。私は自分で見たことだけを信じます」

とカンデラリアは言った。

こういうわけで、裁判の結果、彼女は罰金刑に処せられた。ただ、彼女は弱気にならない。彼女はなんとかして罰金をきちんと支払い、そしてまた講演をした。捕まって裁判。弁護と罰金。その繰り返し。私たちが今回コペンハーゲンで会ったとき、彼女はすでに 4 回捕まっていた。(11)

モニカ・フェルトンにカンデラリアの消息を聞いた白朗は、カンデラリアとの再会を願っていた。めぐってきた再会の機会は、1953 年 6 月に WIDF が開催したコペンハーゲンにおける世界女性大会であった。この大会で朝鮮真相調査団に参加した 21 人のうち 8 人が再会している。白朗はカンデラリアと再会した思い出をこう書いている。

かの英雄の朝鮮の国土で、共に戦った短い期間に、我々は揺るぎない友情を打ち立てた。戦場での友情はかけがえのない永遠の友情である。コペンハーゲンでの出会いで、私はこうした思いを強くした。

今回の世界女性大会は、調査団中、8 人の代表が出席した。(国でいえば、調査団の半分におよぶ) 再会は、もともと、誰もが予想できたことだった。それなのに、意外な出会いであったかのように、驚き喜びがあった。それほど親しく熱狂的に喜びあう光景は、長年離散していた実の姉妹の突然の再会を思わせた。会場内の数えき

(11) 白朗、前掲、119 頁

れないほど多くの人たちが、私たちに一斉に羨望の眼差しを向けた。

大会の会場となった体育ビルの中、最初に私を見つけてくれたのはカンデラリアだった。彼女は私を見つけると、遠くから両手を広げて、かん高い声で叫びながら勇猛に突進して来た。私は、まるで狩りの獲物のようだった。すぐに彼女の腕の中にしっかりと捕えられ、ゆうに 30 秒くらいは、息ができないほどしっかりつかまえていた。キスしたり、激しく揺さぶったり、私の名前を呼んだりして、ついで涙がこぼれでた。彼女は気持ちが落ち着いてから、ようやく誇らしげに私に言った。彼女は、キューバ女性連盟の副会長に選ばれていたのだ。

「人民が私を誤解するなんてありえない。戦争好きな人たちが迫害してもどうってことないよ」

彼女の闘いの勝利を祝って、私たちはまた、熱烈な抱擁をした。私の両頬は、赤いキスマークがいっぱいついた。(12)

こうして白朗のカンデラリア観は第一印象からすっかり変わった。

今、私の彼女に対する印象は変わった。目の前にいる彼女は、物事を深く考えないような女性では全くない。メリメが描いた非常にエネルギッシュな人物—カルメンのイメージが、私の目の前にあった。(13)

コペンハーゲン大会中のある日、ケート・フレロンが幹事役になって、WIDF 真相調査団で朝鮮に一緒に行った友人たちが全員集まったこともあった。白朗はその集会について、こう書いている。

この日、集会参加者のうちでかつて朝鮮に同行した友には全員めぐり会うことができ、この非凡な友情を互いに交した。私の心は、1 日中、暖かな友愛で激しく揺れ動かされていた。(中略)

間が悪いことに、カンデラリアとアバシア（アルジェリア代表）は、発言が決まったと大会から知らせがあった。それでふたりは、ちょっと顔を見せただけですぐあたふたと行ってしまった。私たちの小集会に、情熱家がいなくなって、ほんとに寂しかったよ。(14)

(12) 白朗、前掲、118 頁

(13) 白朗、前掲、118 頁

(14) 白朗、前掲、119 頁

第3章 朝鮮を再訪したカンデラリア

第1節 コペンハーゲン女性大会から三度目の訪朝まで(1953年7月～1993年10月)

コペンハーゲン女性大会終了後、ルーマニアの首都ブカレストにおいて、7月25日～30日に世界民主青年連盟(World Federation of Democratic Youth: WFDY)の第3回大会、続いて8月2日～16日に世界青年学生祭典が開催されている。前者には106か国の様々な団体の代表1500人が参加し、後者には111か国から3万人の青年学生が参加して盛大に開催された。世界青年学生祭典は、世界民主青年連盟と国際学生連盟(International Union of Students: IUS)が「反帝国主義・反戦・平和・親善・連帯」をスローガンに開催する世界規模のイベントである⁽¹⁵⁾。

コペンハーゲンの女性大会に出席した各国代表の多くがここに合流し、キューバの青年男女も多数ブカレストに集まった。カンデラリアもまた、ホルヘ・リスケット、ライオネル・ソト、フラヴィオ・ブラヴォ、アルマンド・アコスタ、フリオ・ガルシア・エスピノーサ、エレナ・ヒル、タニア・カステラノス、マグダレーナ・セラ、スサナ・リウモンなどとともに、この祭典に合流している⁽¹⁶⁾。

この1953年のコペンハーゲン女性大会および世界青年学生祭典以降のカンデラリアの活動や仕事、個人生活などについては、まだ断片的な情報しか集まっていない。カンデラリアがヨーロッパに滞在していた1953年7月26日、フィデル・カストロ率いる小隊はモンカダ兵営を襲撃した。これが1959年のキューバ革命の契機となり、キューバは反バチスタの非合法闘争という政治的激動の時代を迎える。その激動の時代にカンデラリアはどのような役割を果たし、革命後のキューバをどのように生きていったのだろうか。それらは残念ながら今のところ詳細が不明なままである。

それでも『40年後に再び訪ねた朝鮮』を読むと、彼女がアントニオ・マセオやホセ・マルティをリーダーとしたキューバの独立・解放闘争の歴史、またフィデル・カストロが率いたキューバ革命と社会主義建設の歩みに誇りと愛情をもっていたことが随所から窺える。同書が書かれた1993年12月の時点で彼女は自分の人生をふりかえり、「生涯を法廷に、法律家の仕事に捧げ、現在(1993年12月)は退職し年金生活者で、キューバ法律家同盟(UNJC)に加盟するハバナ市法律家協会の議長を務めている」⁽¹⁷⁾と述べている。目立ちやすい政治の舞台にいたわけではないが、フィデル・カストロらと共に歩む道を選び、

⁽¹⁵⁾ 「国際青年権利擁護会議」、法政大学大原社会問題研究所編『日本労働年鑑 第27集 1955年版』：<http://oohara.mt.tama.hosei.ac.jp/rn/27/rn1955-699.html>

⁽¹⁶⁾ 'Bucarest 1953: 4 Festival Mundial de la Juventud y los Estudiantes', キューバ共産党機関紙『グランマ』のホームページ：

<http://www.granma.cu/granmad/eventos/16festival/historia.html>

⁽¹⁷⁾ キューバ法律家同盟(UNJC)のスペイン語表記は Unión Nacional de Juristas de Cuba、英語表記は National Union of Jurists Cuba。UNJCは1977年6月8日に創立された、法律家のNGOである。国際連合経済社会理事会(ECOSOC)において特殊諮問資格を保持しており、キューバにおける女性差別撤廃条約実施のための諸活動にも貢献している。'Vision of the National Union of Jurists of Cuba on the implementation of the Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women (CEDAW) in Cuba.' (http://www2.ohchr.org/english/bodies/cedaw/docs/ngos/UNJC_Cuba55_ForTheSession_en.pdf) 参照。カンデラリアが議長を務めていた「ハバナ市法律家協会」は、『40年後に再び訪ねた朝鮮』では the Lawyer's Association of Havana City と表記されている。

革命後のキューバで法律家として公職に就き、その任務を果たして生きていったのであろう。キューバ法律家同盟 (UNJC) が 1997 年 6 月 8 日、ハバナ大学のアウラマグナ講堂で、UNJC 創立 20 周年イベントを開催したとき、カンデラリアはキューバの法律の科学的発展に貢献したことを評価され、オルガ・ミランダ・ブラボー (国際法キューバ協会副会長)、ティルソ・クレメンテ・ディアス (民法家族法キューバ学会名誉会長・ハバナ大学法学部教授)、エドゥアルド・ララ・エルナンデス (憲法行政法キューバ協会会長) らとともに表彰されている。そのときの彼女の所属は、憲法行政法キューバ協会となっている⁽¹⁸⁾。

話をキューバ革命の頃に戻そう。

1963 年、カンデラリアは朝鮮を再訪した。この訪朝が両国間でどのように協議・決定されたのか、その詳細は未だ明らかではない。が、その背景として、当時のキューバをめぐる東西冷戦の状況を指摘しておこう。すなわち、1959 年のキューバ革命後、米国から敵視されたカストロ政権はソ連に接近し、1960 年にソ連と正式な外交関係を結ぶ一方、国内からの米国企業の排除に努め、米国資本の大企業を国有化してゆく。米国政府は 1961 年にキューバとの外交関係を断絶し、反革命軍をキューバに侵攻させるなどの反革命干渉を行い、カンデラリアが訪朝する前年 1962 年 2 月にはキューバとの輸出入を全面禁止し、キューバの経済封鎖を行うと発表する。同 1962 年の秋にキューバ危機が起こり、米国とソ連は核戦争一歩手前にまでエスカレートするほど激しく対立した。ソ連がキューバに対するミサイル配備を断念したことで一触即発の危機は回避されたものの、キューバ危機を通して米国とキューバの間の対立は決定的なものとなり、ソ連に対するキューバの信頼感も傷つけられた。このような厳しい国際環境にあって、キューバは朝鮮をふくむ東側諸国との友好関係を積極的に築こうとしていたということである。

他方、朝鮮戦争後の朝鮮民主主義人民共和国では、朝鮮戦争による破壊から立ち直り、日本植民地時代に立ち遅れさせられた生産力を急速に現代的水準に引き上げるために「千里馬の気風」が強調され、千里馬運動が国をあげて推進されていた⁽¹⁹⁾。「千里馬」とは朝鮮の伝説で一日に千里を走るという名馬をいう。「千里馬の気風」とは、復興と改革・社会主義建設の速さと、それを支える朝鮮民族の革命的気風を象徴する語なのである。人々の意識を鼓舞するために、天を駆ける巨大な銅像も立てられた。「千里馬運動」は全国的に展開され、積極性と創意性によって成果をあげた労働者・農民たちは「千里馬騎手」として賞賛された。カンデラリアは『40 年後に再び訪ねた朝鮮』において 1963 年の訪朝について詳しく書いていないが、当時の朝鮮について、「朝鮮は戦争の廃墟のなかから立ち上がり始めていた。千里馬運動は絶えざる前進を意味したが、朝鮮はいまだ発展途上だった」と回想している。彼女はそのとき入手した千里馬銅像のミニチュアをその後ずっとキューバの自宅に飾っていたという。

1963 年の訪朝以後、カンデラリアが朝鮮以外の外国に赴く活動をどの程度していたかは未だ不詳である。しかし、たとえば 1979 年 2 月 15 日～19 日に米国のサンフランシスコで開かれた全国法律家ギルドの第 37 回全国会議の記録には、外国からのゲスト 5 人の一人として「カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデス (キューバ法律家全国ユニオン: UNJC)

⁽¹⁸⁾ "Notijurídicas Revista Cubana de Derecho", No.12(1998 年 12 月), p.168.

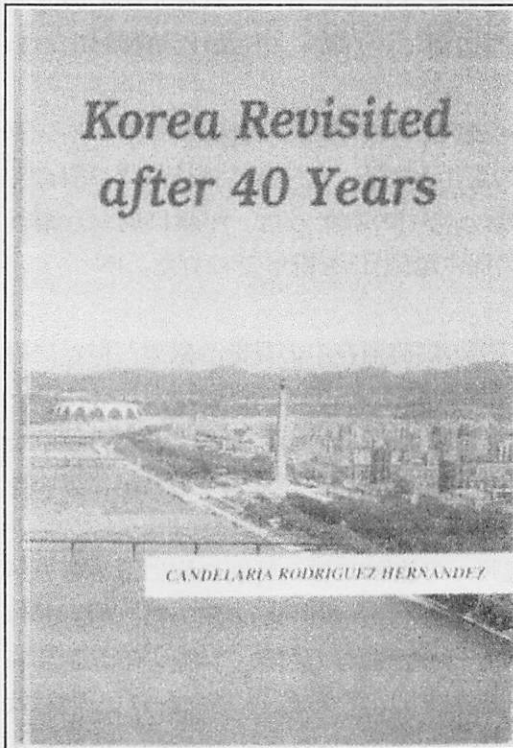
⁽¹⁹⁾ 1963 年、日本の撮影監督である宮島義勇は北朝鮮を取材し、翌 1964 年にドキュメンタリー『チョンリマ (千里馬)』を発表した。

の名前が載っている⁽²⁰⁾。「出席予定だったが欠席」と書かれており、この集会には参加しなかったことがわかるが、このような国際会議や国際交流の集いにキューバの代表として出席することが他にもあったのではないかと思われる。キューバにとって、米国の反革命武力干渉や経済封鎖によって押しつぶされることなく国家建設を進めるために、キューバ革命への理解を広く世界に求め、革命を支持する諸外国からの援助を得ることが必要だったからである。

ソ連からの支援が弱まった 1980 年代には、朝鮮民主主義人民共和国をふくむ友好諸国との関係がますます重視されるようになった。1982 年にソ連のアンドロポフ書記長からソ連はキューバが米国から軍事攻撃を受けたとしても支援しないと通告されたキューバ政府は、この情報を米国に悟られないように政府内部でも機密扱いとし、朝鮮に援助を求め、ライフルなどの装備に関して無償の援助を得たといわれる⁽²¹⁾。

1990 年代初頭、ソ連および東欧の社会主義政権が次々と崩壊する。1992 年 4 月 20 日には旧ソ連や東欧で新たな社会主義運動を展開する諸政党を含め、社会主義を志向する世界 70 の政党代表が平壤に集まり、「社会主義の偉業を擁護し前進させよう」という平壤宣言に署名している。キューバ共産党はこの平壤宣言には署名していないが、キューバ政府は朝鮮民主主義人民共和国との友好関係を維持し発展させることを重視していたであろう。

カンデラリアによる三度目の朝鮮訪問は、『40 年後に再び訪ねた朝鮮』を読む限り、カンデラリア個人を共和国政府が招待する形で始まったものであるが、背景にはこのようにソ連および東欧の社会主義崩壊という事態の中で、社会主義擁護のための国際的な友好・協力が朝鮮・キューバの両側から求められていたという事情があった。節を改めて、カンデラリアの三度目の訪朝の様子を概観してみよう。



小冊子『40 年後に再び訪ねた朝鮮』の表紙

第 2 節 三度目の訪朝

1993 年秋、カンデラリアは朝鮮民主主義人民共和国からの正式な招請状を受け取る。

⁽²⁰⁾ 'National Lawyers Guild':<http://keywiki.org/index.php/NLG>

⁽²¹⁾ フィデル・カストロが キューバ共産党機関誌『グランマ』(2013 年 8 月 13 日付) で明かしたもの。キューバ友好円卓会議のホームページ (http://cubaentaku.web.fc2.com/sub/saru13_P6_8.pdf) など参照。

すでに退職し年金生活を送っていたカンデラリアは、この思いがけない招待を受け、自分の40数年前の朝鮮に対する貢献が忘れられていなかったことに驚喜した。

これは夢か真実かと私はいぶかった。夢ならば覚めないでほしいと思った。

私はマリア・エレナのところへ駆けつけ、自分が夢を見ているだけなのか、私の腕をつねってほしいと頼んだ。夢ではなかった。

訪問を準備している日々に私を捉えた感情、喜び、疑いを書き記すことは難しい。

私は自分が知る40年前の血の海で洗われた朝鮮を思った。私の心の眼には、残酷な戦争、瓦礫の山、燃える家々、無慈悲な爆撃によって作られた地面の穴、焼けて灰になった砲弾の破片が残された大地…などの光景が浮かんだ。

いかにして朝鮮は、帝国主義の首領と対決しつつ、40年という短期間に立ち上がることができたのだろうか？

社会主義の砦と思われていたソビエト連邦はある日煙のように消え失せ、欧州社会主義諸国は今では資本主義の苦い薬を飲まされている。これらすべての光景が、私に朝鮮について、世界、歴史、人類の前に誇り高く立ち続ける朝鮮について考えさせた。

そうした思いにふけりながら、私は海を越え、モスクワへと向かった。モスクワに到着すると、駐ロシア朝鮮大使が私の誕生日を祝って夕食に招待してくれた。私はそんな丁寧なもてなしを受けるとは思ってもいなかった。平壤に向かう飛行機のなかでは、朝鮮人のスチュワーデスが私の誕生日を祝ってくれた。⁽²²⁾

『40年後に再び訪ねた朝鮮』には、カンデラリアの朝鮮滞在中の見聞や感想が様々に綴られている。彼女は朝鮮戦争時代の灰燼に帰した朝鮮を想起し、キューバの詩人レジオン・ペドロソの闘いの詩を思い出しながら、現代的な高層建築や広い道路と青々と茂る並木を見つめ、「すべてが変わっている」ことに感動し、朝鮮の人々のこれまでの苦闘に思いを馳せる。

かつて WIDF 調査団の一員として訪ねた新義州への旅⁽²³⁾には、特別に胸に迫るものがあったようだ。新義州は忘れがたい場所だった。新義州へ向かう列車の中では、朝鮮対外文化連絡協会のチョン副議長や他の朝鮮人と、キューバと朝鮮の友好、共通の敵と闘う両国人民の連帯、両国での社会主義建設といった話題で盛り上がった。「キューバと朝鮮は地理的に離れているが、共通の敵たる米帝との闘争では革命的戦友として団結している」といった言葉をかけられ、心は暖かさと喜びでいっぱいだった。車窓からはすばらしい家々や工場などが見え、40年前の破壊の痕跡はどこにも見当たらない。

カンデラリアは、40年前に新義州で自分が踏みしめて渡った木橋や調査団が泊まった宿舎の残影を心に焼き付けていた。WIDF 調査団は1951年5月のある満月の夜、深夜にカモフラージュした小船で鴨緑江を渡って朝鮮に辿り着き、うっかり渡れば崩落しそうな古

⁽²²⁾ Candelaria Rodriguez Hernandez, "Korea Revisited after 40 Years", Foreign Languages Publishing House, Pyongyang, Korea, 1994, p.2.

⁽²³⁾ Ibid., pp.2-8.

い木橋を渡ったのだ。カンデラリアの心に 40 年前の朝鮮女性たちとの出会いが蘇る。質素な夕食のとき、そばに座っていた朝鮮人女性が静かに何か子守唄のような歌を歌い始めた。彼女はカンデラリアの手を固く握り、自分の胸に押し当てた。言葉は通じなくてもお互いの思いは理解しあえた。その一夜を調査団員たちは再三の空爆で破壊された建物の一角を宿舎として過ごした。ジープで平壤に向う途中に遭遇した米軍機の機銃掃射に、カンデラリアは恐怖に震えた。彼女はその記憶をこう綴っている。

「ハンゴン」という空襲の航空警戒警報が「死」と聞こえた。私と仲間たちは防空壕に駆け込んだ。すぐに、銃弾が私たちの近くに飛んできた。私は怯え、母と父のことが頭に浮かび、故国に戻れるのだろうかと思った。私の仲間たちは子どもや家族のことを思って涙を流したが、決して怖気づかなかった。今でも「ハンゴン」という言葉を思い出す。それは今でも私には「死」と聞こえる。(24)

新義州の高層ビル、舗装道路、美しいモニュメントやレストランがある全く新しい都市、過去の痕跡がない現代都市に、カンデラリアは目を瞠った。40 年前に WIDF 調査団が宿泊した場所に行ってみると、建物は再建されて児童図書館として使われている。木橋もなくなり、かわりに鉄橋がかかっている。カンデラリアがあるはずのものが無いとうろたえていると、チョン副議長が「チェ爺さんの小話」を紹介してチェ爺さんをカンデラリアに喩え、一同大笑いをしたという。「平壤のどこに何があるかよく知っている」と自慢していたチェ爺さんが、妻と共に 10 年ぶりに息子が住む平壤に行ってみると、街はすっかり見違えるように再建されていて、チェ爺さんには通りも家も何もかもまるで分からなかった、という小話である(25)。

カンデラリアは滞在中、1951 年の重要な訪問地のひとつであった信川をも再び訪ね、米軍による虐殺蛮行の資料を展示する博物館を見学している。来館中の在日朝鮮人の生徒たちに 1951 年の春に自分が見たことを語った。その生徒たちは、日本の朝鮮民族学校から修学旅行にやってきていた子どもたちだったと思われる。

黙り込んでいた私を生徒たちはじっと見つめた。彼らは自分たちよりも打ちひしがれた様子の外国の老女を不思議に思っているようだった。

しばらくして、私は当時起きたことのすべてを話した。

すぐに生徒たちのすすり泣きが聞こえてきた。私は彼らに女性や老人や子どもたちの叫び声について、家族をすべて虐殺された一父は礫にされて殺され、母は胸を切り裂かれ、兄たちは生き埋めにされた一ある少女について語った。

私は彼らに敵が妊婦のお腹にいた赤ん坊を殺したこと、信川や私たちが会ったすべての人々が犠牲者のために嘆くのではなく、いかに厳粛に復讐するかについて語っていたこと、彼らは金日成將軍に率いられていれば勝利すると信じていたことを話した。(26)

カンデラリアは、話を聞いてすすり泣く生徒たちに、恐れずに闘うようにと激励した。

(24) Ibid., p.6.

(25) Ibid., p.7.

(26) Ibid., pp.48-50.

帝国主義の攻撃に不屈の民衆は必ず打ち勝つことができるという信念を、カンデラリア自身が持ち続けてきたのだろう。1961年のキューバにおけるプラヤ・ヒロン侵攻事件（ピッグス湾事件）と1950年の朝鮮戦争は、キューバと朝鮮の民衆には帝国主義からの攻撃を打ち破る力があることを示しているのだから、と。

実際、復興を遂げた朝鮮の様子は、帝国主義の攻撃に対する朝鮮民衆の勝利を証拠だてているように感じられただろう。カンデラリアは、滞在中に各地の近代的な企業所や、高層建築物、インフラ施設、整った学校、優雅なホテルなどを見学し、朝鮮の再建ぶりに瞠目した。

カンデラリアはまた万景台や万景台革命学院、革命家烈士陵、妙香山の国際親善展覧館や革命博物館、板門店などの各地を案内された。日本植民地支配下の抗日武装闘争から朝鮮戦争、停戦後の祖国再建の苦闘に思いを馳せ、朝鮮民族の闘いの歴史とキューバ民衆の闘いの歴史を重ねあわせて胸を熱くしたようだ。

マルティはその不朽の詩の中で「私が祖国もなく、主人もなく死んだら、私の墓に花束と旗を置いてほしい」と歌った。我らが青銅のタイタン、マセオと彼の勇敢な男たちは、ほとんど素手で鉋だけを武器に、高度に武装した敵軍に大打撃を与えた。ドミニカ出身のキューバ人、マキシモ・ゴメスはスペインの植民地支配に対する反乱の偉大な総司令官だった。長い年月を経て、シエラ・マエストラで、フィデルが率いるゲリラは暴君の兵士たちを負かしたが、私たちは米帝の犯罪的な経済封鎖を解除するためになおも闘い続けねばならないでいる。(27)

『40年後に再び訪ねた朝鮮』には、朝鮮の子どもや女性たちへのカンデラリアの共感がにじんでいる。革命烈士の遺児たちが学ぶ万景台革命学院やこの学院の初期に貢献した金正淑にまつわる話を聞いたカンデラリアは、革命烈士陵にある金正淑女の胸像の前で悲しみをおさえきれず、立ち尽くしていた。その様子を見た朝鮮人生徒たちの目にも涙が浮かび、彼女は子どもたちを抱きよせて悲しみを共にした(28)。

また、キューバからの来訪者を歓迎して「キューバ・イエス、ヤンキー・ノー」という歌を歌う生徒たちに会って感激し、来訪者名簿に「革命と祖国のためにしっかり勉強して下さい」と記した。カンデラリアは子どもたちが腕をつかんで離そうとしないので立ち去りがたく、この子どもたちの様子を見て朝鮮の未来の確かさを確信したという(29)。

抗日武装闘争を闘った二人の女性、朴ジョンソクと金ヘスンにも会った。二人とも高齢だがかくしゃくとしていた。抗日戦争下には氷点下40度の山中を男たちと同じように行軍し、野営地では洗濯や繕いもの、食事の準備も担ったという。朝鮮女性の15年間にわたる闘いの体験をカンデラリアは大いなる尊敬を抱いて聴き、彼女たちや勇敢に闘ったすべての女性たちこそがこの国の支柱だ、と心を高ぶらせた(30)。

カンデラリアは19世紀のキューバ独立運動の指導者で国民的英雄であった作家ホセ・マルティの「洞窟の奥底から正しい思想が現れる」という言葉を引き合いに出して主体思

(27) Ibid., p.9-19.

(28) Ibid., p.13.

(29) Ibid.

(30) Ibid., pp.13-15.

想を讀え、ソ連・東欧の社会主義の崩壊原因を歴史の主体たる人民を軽んじたことにあるとする金正日の論説「社会主義建設の歴史的教訓と我が党の総路線」に賛同する。そして「人民大衆の創造的な努力によってこそ社会主義は発展する。人民大衆が党の周囲に団結してこそ社会主義建設が可能だ」という主張として、朝鮮の主体思想を紹介している⁽³¹⁾。

「キューバは、フィデルの指導の下で断固として社会主義を防衛してきた。米国による経済封鎖、敵対的なラジオ放送、強力なプロパガンダ作戦、反革命グループのキューバへの潜入という困難な条件の中で、キューバが人民はフィデルのまわりに団結し、『社会主義か死か、祖国か死か、我々は勝利する！』というスローガンで断固立ち上がってきた」⁽³²⁾。カンデラリアは、そのようなキューバ社会主義の思想を媒介にして朝鮮とその主体思想を理解しようとし、キューバ・朝鮮の両国人民の団結がソ連・東欧社会主義の崩壊を乗り越えて社会主義を建設する新しい力となることを熱望したのであろう。

すでに老境に入り、キューバでは公職を退いた後の寂寥感を抱いていたカンデラリアであったが、三度目の訪朝の間中、朝鮮の国賓として厚遇され、金日成主席とも二度にわたる歓談の機会があり、11月11日には親善勲章第一級が授与されている。在朝鮮キューバ大使館もカンデラリアを迎えて大騒ぎであった。カンデラリアは『40年後に再び訪ねた朝鮮』に、この訪朝で自分は若返り、人生が再び花開くような思いであった、と書いている⁽³³⁾。ソ連・東欧社会主義の崩壊というキューバにとっても危機的な時代状況の中であって、この朝鮮への旅はカンデラリアに青春時代の情熱をよみがえらせ、新しい生命力をふきこんだのかもしれない。

(終わりに)

本稿は、三度にわたる訪朝を焦点に、カンデラリア・ロドリゲス・ヘルナンデスの人生を追跡した。収集した資料が少ないために伝記というには不足する点が多いが、それでもWIDF調査団において彼女がどんな存在だったかある程度まで明らかにすることができた。モニカ・フェルトンや白朗たちの著作が示すように、はるばる地球の裏側から極東の朝鮮戦争戦場までやってきたカンデラリアは、その若さと勇気と情熱と闘志でヨーロッパやアジアで多くの人たちに強い印象を残したことだろう。

WIDF調査団の参加者たちやコペンハーゲン世界女性大会やブカレスト青年学生祭典でカンデラリアに出会った女性や若者たちにとって、カンデラリアはキューバの女性・若者を代表する人物であった。1959年にキューバで革命が起きたことを知ったとき、彼女ら彼らはカンデラリアの熱情と闘志、くるくる回る目や朗々と響く声、彼女によく似合っていた深紅の服のことを追懐したことだろう。

1951年に朝鮮から帰国した後のカンデラリアは、キューバ女性連盟の活動家として、あるいは法律家として、どのように活動していったのか。キューバ革命を前後する激動の時代をどのように生き、どんな役割を果たしたのか。社会主義社会を建設するという難事業

⁽³¹⁾ Ibid., pp.15-17.

⁽³²⁾ Ibid., p.18.

⁽³³⁾ Ibid.pp.60-69.

にどのように関与し、いかなる葛藤や苦闘を経験したのか。カンデラリアは晩年の日々⁽³⁴⁾をどう過ごしたのか。それらの問いに取り組むことが、今後の課題である。カンデラリアという一人の女性の生涯を見つめることによって、女性史の視点からキューバ現代史に接近することができれば幸いである。

カンデラリアの人生を追跡することは、アジア現代女性史の研究課題でもある。すでに1951年のWIDF調査団から64年、カンデラリアの三度目の訪朝から22年が過ぎた。が、朝鮮半島は依然として南北分断が続き、朝鮮戦争の軍事的緊張はいまだに絶えない。WIDF調査団の女性たちは国境を越え、冷戦の壁を越えて朝鮮の平和を追求した。カンデラリアたちの思いや足跡をたどることで、冷戦時代の女性たちの平和への意志を受け継ぎ、彼女たちの時代には果たされなかった朝鮮戦争の真の終結への道を探し続けたいと思う。

⁽³⁴⁾ カンデラリアに関する調査を始めたとき、1928年生まれ彼女はキューバでまだ健在かもしれないと期待していた。が、昨年2014年初めに塩出綾さんの協力を得てUNCJに問い合わせたところ、「残念ながらしばらく前にお亡くなりになりました」と、事務局のヤミーラ・ゴンサレス・フェレー (Yamila González Ferre) さんから返信が届いた。生前のカンデラリアを知る人を探せるよう助けていただけると有り難い申し出をいただき、キューバを訪ねたいという思いにかられたが、それが実現できるのはまだ先のことになりそうである。